

「人作り・人材育成」－研修業務への我々の取り組み－

第3回：研修効果を倍増させるフォローアップ活動

国際耕種は JICA 筑波国際センターからの委託業務としてタジキスタンや南部アフリカ諸国対象の野菜栽培分野での研修活動を、この4年ほど継続して実施している。同センターでは栽培分野以外にも、農業機械、灌漑排水などの研修が行われており、それぞれの分野における自国での農業の発展に貢献することを目指して、多くの研修員がこの研修に参加している。こうした研修活動の最終的な目的は、日本で学んだ技術を活かし、自国の農民達の生計向上に資する事であり、ひいては当該国あるいは地域の農業発展に貢献することである。

上述のように国際耕種はタジキスタン国別特設野菜栽培コースを数年に渡って実施してきたが、昨年の研修を最後に終了した。この研修に関して、帰国研修員のその後の活動状況や今後の研修ニーズの把握などを調査することを目的として、フォローアップ調査が実施され、我が社のスタッフもこの調査に参加する機会を得た。研修員の多くは研究者、普及員、生産農家など農業に従事する各分野から選ばれており、帰国後も日本の研修で得た知識や技術を有意義に活用していた。パレイシヨ種芋の量を5ton/haから3ton/haに減量、パレイシヨの芽かきの実施、ポット苗の生産、今まで捨てていたわらを使つての堆肥の製造など研修を通して得られた技術を自分たちなりに工夫し応用がなされている。また、研修で入手した資料やビデオで接ぎ木などの授業を行っているなど、帰国研修員の努力には敬服するものがあった。しかし、一方で様々な課題も見出されている。例えば、日本から持ち帰った器具がうまく利用出来ない。あるいは、現地では資機材の入手が困難で、簡単な資機材も得られないため、研修で得た技術を応用出来ない。配布資料の多くが英語のため、研修員の力では十分な翻訳が出来ず、うまく活用できない。さらに、野菜栽培以外の果樹栽培や普及分野などでも問題を抱えている場合もある。

国際協力の中での研修事業の重要性は「人作り・人材育成」という意味で、今後ともその重要性が深まることは間違いない。また、研修自体が「日本の良き理解者」を作ることにつながる点からも大きな意義がある。そのような中で各開発途上国の事情に配慮しながら、研修員の活動を通して当該国に対する技術貢献を行っていくことは重要である。さらに、研修員は各国の代表として選ばれた人材であるため、彼等が自国の農業開発の中心的存在であるとの意識を持てるように、研修する側から強く働きかけることも重要であろう。

帰国研修員はそれぞれに問題や課題を抱えながら、地域の農業発展に貢献すべく頑張っている。今回のフォローアップ調査を通して、彼等の帰国後の問題や課題に何らかの形で答えていく事の重要性を強く感じた。つまり、日本で受けた研修の成果を、各研修員達が今後の日常業務の中で効果的に活用していくために、研修後の研修員支援に関して本体の研修部分と有機的に関連付けて実施出来るような仕組みや実施体制作りが必要ではないだろうか。例えば、優秀なアクションプランに対して実施のための補助が考慮されると、研修員にとっては大きな励みになる。また、草の根技術協力事業との連携もちょっとした工夫で実現可能と思われる。帰国後の悩み、課題を研修にフィードバックして新たな研修課題に盛り込むことは新規研修員に貴重な情報・技術を提供できる。国際耕種でも、有望な研修員に対しては独自に展開している草の根型協力活動を通じた支援も考えている。そのためにも、帰国した研修員に対して情報を流し続け、彼等からの働きかけに対しては意見交換や技術支援をするように努力している。こうした肌理細かなフォローアップ活動によって、国内における研修事業の効果をよ大きくすることができるものと信じている。



帰国研修員への聞き取り



日本から持ち帰った農業資材



研修員指導農地（小枝マルチ）